〈書評〉

関　雄二、狐崎知己、中村雄祐　編著

『グアテマラ内戦後　－人間の安全保障の挑戦－』

明石書店 2009年 278頁

上智大学外国語学部　幡谷則子

1. 本書の問題提起と特徴

36年の内戦の後、公式な和平調印が締結された1996年をもってグアテマラの内戦終結とするならば、すでに同国は「ポスト・コンフリクト期」にはいって久しい。他方、米軍が撤退を決めたイラクを始め、イスラエル、パレスチナ問題を抱えた中東諸国など、世界各地で安全保障はおろか、人間の安全保障を当該国政府が守りきれない実情は依然として続いている。グローバル化が進み、21世紀に入り10年にならんとする今日、人間の安全保障問題はさらに悪化していると考えられる。本書はこのような危機意識をもって編まれた。

本書は内戦後の社会がその社会復興に対して抱える数限りない課題に対し、アカデミアからどのような貢献ができ得るかを、グアテマラを事例に、具体的なプロジェクトの実践とその評価を介して問うものである。執筆者の専門も、人類学（法人類学を含む）、経済学、教育学のほか、農学－植物遺伝育種学まで、多岐に及ぶ。これも本書が人間の安全保障の実践における専門性と総合性の双方を意識した研究アプローチであることを示している。もう一点特筆すべきは、研究者グループとJICAとが共同作業で行った国別特設研修（2005年から2007年）を通じて実施されたアクション・リサーチの評価分析（4章から6章）が収められ、アカデミアの「紛争後の社会復興」への貢献分野を提示していることである。本書にはJICA以外の団体が関わった実践例も収められているが、日本の公的国際協力機関の筆頭であるJICAとアカデミアがNGO活動家や現地のコミュニティリーダーたちと議論を重ねながら、文字通り草の根の国際協力について追求した結果をとりまとめたという点において、ラテンアメリカの事例では嚆矢となろう。

2. 本書の構成と概要

本書は序章と追記のほか、6章から構成されている。以下、各章の内容を簡単に紹介する。

第1章では、法人類学者でグアテマラ現地NGO「平和のための歴史化」のフェルナンド・モスコソ代表が、グアテマラ中央部バハ・ベラパス県、ラビナル市一帯のジェノサイドの様相を、その一共同体であるリオ・ネグロ村での虐殺事件とその証言、秘密墓地発掘と和平プロセスでの一連の裁判の経過について詳細に分析する。和平協定における包括的人権協定においては、ジェノサイドに対する正義の履行と国家による損害補償が盛り込まれていたが、その進展は極めて限定的であった。多くのケースが司法の場に持ち込まれても、法的追及が継続されることはなく、責任者を有罪判決に至らしめたのは、リオ・ネグロ事件のみであった。本章は、包括的人権協定と正義の国家による履行の乖離を批判的に指摘する一方、国家以外の民衆組織やNGOなどの手によるジェノサイド訴訟の進展の可能性を訴えるものである。

第2章では、関雄二が「平和のための歴史化」による3年間の記憶の回復プロジェクト（内戦下、最初の大量虐殺が行われたパンソス市に、コミュニティ・ミュージアムやモニュメントを建設し、暴力の歴史を記憶する装置を創設した事業）を紹介し、その社会的意義を論じている。関は本プロジェクトの評価として、記憶の歴史化はもとより、次世代の地域社会におけるリーダー養成に貢献した点をあげている。その一方、3年間の現地調査からは、すでに記憶の回復装置としての機能不全が起こっていることも指摘する。虐殺の当事者とそれを記憶に納めた歴史の推進者となるべき次世代との間には関心や関係性の差があるためである。集団的犠牲の強調が個人の死に対する記憶を覆い隠す効果をもつことについても指摘がある。関は公的な記憶（政府が主張する歴史）に対するヴァナキュラーな記憶として本プロジェクトの活動を位置づけ、その2項対立的な記憶の扱いに対しては慎重な立場をとりつつも、グアテマラにおけるジェノサイドの記憶の歴史化には、ヴァナキュラーな記憶の活動が公的な記憶と対話・交渉を始めるための有効で必要な手段であると評価している。

第3章は、ポスト･コンフリクト社会における二言語教育（スペイン語と先住民言語）の実態への多面的アプローチを試みた、渋下賢・久松佳彰・上岡直子の共著である。二言語教育の推進は、先住民の社会的地位向上に不可欠とされ、紛争後のグアテマラにおける最優先課題の一つである。同化主義的政策として始まっ

た二言語教育は1980年代、マヤ文化再興運動によって変貌する。内戦終結交渉においては、1995年の「先住民族の権利とアイデンティティに関する協定」が含まれたことで、和平協定内容に先住民の文化的権利が盛り込まれた。現在の二言語教育は、先住民が自主的に価値観、文化、言語の復権をめざす教育を推進する主体となっていることが特徴である。従来の同化政策的二言語教育と異なり、母語からスペイン語に移行するのではなく、先住民言語が一貫して使用される。本章では政府の多言語・異文化教育の推進という建前と、政策の機能不全、無関心などとの乖離を指摘しつつ、マヤ的な世界観や哲学を尊重しつつ、地方分権・住民の政治参加や職業訓練などへの取り組みを行っている多様な草の根レベルの事例をとりあげ、二言語教育の課題と方向性を探る。

第4章は、学際的研究者チームがポスト・コンフリクト社会としてのグアテマラの北部地域に復興協力をテーマとして実施した重層的アクション・リサーチのうち、狐崎知己が担当した和平協定の履行評価と国際協力に対するマクロ分析と、3年にわたったJICA研修の概要を紹介したものである。国連仲介のもとに政府とグアテマラ民族革命連合の間で1996年に和平協定が締結され、その後紛争が再燃することなく選挙による政権交代が持続されているのは和平協定の成果として高く評価できる。だが、和平協定がめざした紛争の構造的要因の解決に対する履行評価は、国際社会からの莫大な支援とは裏腹に、極めて低い。その要因は、ドナー側の援助効果に対する期待値とグアテマラ政府の政治的意思やガバナンス能力との乖離などに求められる。他方、政府以外の専門家がグアテマラ国内外を越えてジェノサイド実態解明に乗り出したことが一連の成果をあげている。このほか、本章は国家の補償プログラムの遂行組織である国家補償委員会の機能不全についてもその要因分析を行っている。和平協定の履行を阻害する要因として近年の治安問題の悪化を指摘する。また、履行に必要な国内資金の確保に関わる経済発展と財政改革についても政治経済学的な分析を行っている。続いて、一連の和平協定の行き詰まりを打開する試みとして筆者が立案し、その後JICAグアテマラ国別研修として実施された「公共政策の計画立案の能力向上」プロジェクトの内容紹介とその評価を行なっている。従来の方法と異なり、JICA研修生の現地での選考や、日本での研修目的や内容に研究者チームが直接関わったことが新しい。

第5章では、既述のJICA研修に研究者グループの一員として参加した中村雄祐が、「地域リーダーと文書管理」の視点から復興過程への貢献について分析を行っている。中村は地方行政を担う地域リーダーが文書管理能力を向上させることが、ポスト・コンフリクト期の地方における復興過程に重要であると主張する。東京

でのワークショップのほか、現地でのフォローアップやJICAグアテマラ事務所での講義の紹介と評価を行っている。各回の反省をもとに、研修者の選抜において異なる世代を反映させる努力をし、その効果を分析している。ワークショップの企画過程に研究者が主体的に関わったアクション・リサーチであったがゆえに可能となった取り組みである。

第6章では根本和洋が、先住民文化に根ざした平和構築支援のための地域発展プログラムとして、マヤ伝統作物「アマランサス」の復興について考察する。メソアメリカ起源で古代文明時代の食糧であった作物、アマランサスはその栽培が激減した。しかし、マヤ先住民の同作物に対する記憶の回復と栽培利用の復活が、マヤ先住民文化の復興に資する意義をもつと説く。JICAグアテマラ国別特設研修においても、同課題が取り込まれ、根本が講師として参加した。そのときのマヤ系先住民研修生との交流から、筆者は伝統作物の復活が先住民文化復興に役立ち、さらには平和構築にもつながる可能性を確信している。マヤ人にとって、武力紛争下で絶滅の危機に瀕していたアマランサスを回復することは、先祖伝来の生業と食文化の記憶を取り戻すことを意味する。日常生活の栄養状態の改善に資するという意味において、アマランサスは現代的な人間の安全保障に直結するが、それは同時にマヤ民衆の欠乏と恐怖の歴史の象徴でもある。

追記では狐崎が本書脱稿後2008年末までのJICA研修生の活動記録を補足し、中期・長期的活動の評価を行っている。グループ・ダイナミックスの発展―研修生の参加年次、エスニシティ、ジェンダー、世代を超えた信頼関係の形成―は、3年間のJICA研修の終了後も、帰国研修生たちが現地で多様な活動を展開しているがゆえに達成された。この事実は、会計年度ごとに一定の制約を受けざるを得ない公的資金による国際協力の持続性を裏付けるものである。

3. ポスト・コンフリクト社会へのアカデミアの貢献

本書は「実践人類学シリーズ」の1冊であり、基礎学問における事例研究のそれぞれが、その社会的活用までを視野に入れて編纂されている。ポスト・コンフリクト社会の復興という文脈と人間の安全保障という課題は、開発・国際協力の実践の場と領域であり、今日のグアテマラはまさに「実験場」としての時空を提供している。

本書の最大の価値は、学問領域における貢献、特に既存の理論的枠組みや概念に対して新地平を開拓し、新理論を構築するという類の貢献というよりも、むし

ろアカデミズムが果たすべき社会的貢献という課題に正面から取り組んだところにある。各章とも、歴史的背景の考察以外は、JICA研修の内容をはじめ、具体的な和平構築・復興に関わる実践プロジェクトの描写とその評価分析に多くの紙面を割いているのは明白である。誤解がないように付け加えれば、だからといって、決して理論的還元という点における学問的価値が低いといっているのではない。「人間の安全保障」を中心命題とする場合、研究・実践の両面において多岐にわたる領域に拡大せざるを得ないことを、実践の場におけるアカデミズムのダイナミックな関わり方によって実証している。序論と追記では、本書を編み出すプロジェクトが総合的・重層的なアプローチであったことが時系列的に整理されており、各論の配置とその整合性に対する理解を助けている。さらに、本書の学問的価値は、その調査法における成果にある。実践社会科学（応用社会学/人類学、開発社会学/人類学など）の発展にむけて、アクション・リサーチを貫いた各章には随所に調査方法上の試行錯誤と教訓が提示され、それらがグアテマラというローカル・コンテクストを超えて、ポスト・コンフリクト社会あるいは人間の安全保障や広く社会開発の分野で応用可能なさまざまの知見となっている。惜しむらくはこうした諸点への、より明示的で系統だった考察が不足したことである。

評者は本書で紹介されているJICA研修生との交流の場に遭遇する機会があった。そのときの印象を反芻しつつ本書を読むことができたのは幸いである。研修生の多くが武力紛争の直接犠牲者であり、紛争後の国づくりと先住民の復権に主体的に関わろうという政治的意思の強い、マヤ民族の指導者たちであった。研修者の選考から彼らのニーズに立脚した日本での研修と交流計画の策定にまで研究者が関わったことが説明された。交流の場でのモニタリングにおいて、研究者や大学院生たちが主体的に関わっていることを目撃し、体感した。それがJICAの枠組みを取り込んで実践された主体的アクション・リサーチであった点は評者にとって、衝撃的な驚きであった。

地域の「普通の人々」の目線に立ったフィールド調査を心がける者として、研究者の関わりがどこまで社会還元に結びつくか、という問いは常にのしかかってくる課題であり応えるべき責務である。アクション・リサーチに正面から取り組み、かつJICAの研修事業を主体的に引き込み、内側から地域立脚型に変容させた事実は、評者を圧倒し、これに敬意を払うほかはない。この実現の可否は、個々の研究者の思想的立場、社会貢献にコミットする勇気と使命・責任感にかかっている。さらに、確固たる意思だけではなく、研究者、国際協力の実践機関に関わる人々、そして現地協力者との間での信頼関係の醸成に負うところが大きい。他